白文に挑戦しよう！

2024・5・1　KENZOU

高校の教科書などに載っている漢文は、レ点や一、二点、上下、甲乙など、漢文の読み方の順番を示す訓点が付いているので、少し訓練すれば漢文を読むのはそれほど難しいことではありません。しかし、漢字が羅列されているだけの白文を読もうとすると、眼前に足場の見えない切り立った岩肌が現れ、足が竦んで只々茫然とする有様です（小生だけ？）。しかし、茫然自失していても仕方がないので、登っていくための必要な装備の準備とその訓練をしようというのがささやかながら本稿の意図です。語学と言えば文法の知識が必須ですが、いまさら文法はしんどいのでその詳細はスルーし、要点のみをピックアップすることで前進していこうと考えています。内容は参考図書（1）を全面的に参照しています。

Ⅰ・基本装備篇

●漢文は孤立語

加藤徹著「漢文法ひとり学び」によれば、漢文は、単語をレンガやタイルを敷きつめるように並べて文を作る「**孤立語**」で、西洋の言葉は時制とか格とかの変化に合わせて単語の語尾を屈折させる「**屈折語**」、日本語は「てにをは」などの助詞を単語の後ろに膠のよにくっつける「**膠着語**」と書かれています。

孤立語には

○格変化・活用なし

○単数・複数の区別なし

○現在・過去の時制なし

となしなし尽くしのため、文意は前後の文脈から判断することが要求されます。例えば「子子孫孫」は次の2通りの読みが考えられ

「子子孫孫」

子々孫々

子、子たり。孫、孫たり

どちらを読むかは前後の文脈からの判断となります。漢文の基本構造は英語の構造とよく似ていますが、現在完了・過去完了・現在進行形などの時制はないので、現在の事象か過去かなどは前後の文脈から判断しなければなりません。尚、「**置き字**」という読まない字はよくご存じのことと思いますが、これは先ほどの〝なしなし尽くし〟の穴（？）を埋めるのに役立ってくれますね。

（1）漢文の基本構造

主語・述語・目的語・補語をそれぞれS・V・O・Cとします。いつも主語（S）が付いているとは限りません。いずれにしても白文を読んでいくには漢文の基本構造は必須の知識となるので、しっかり頭に叩き込んでおく必要があります。

（1）S＋V

我行。（我は行く）
S V

我王臣。（我は王の臣なり）
S V

（2）S＋V＋O

我看花。（我花を看る）
S V O

V＋O（主語省略）

懸羊頭売狗肉。（羊頭を懸げて狗肉を売る）
V O V O

（3）S＋V＋C

我登山。（我山に登る）
S V C

霜葉紅於二月花。（霜葉は二月に紅なり）
S V C

（4）S＋V＋O＋C

王問政於孔子。（王政を孔子に問ふ）
S V O C

我見花庭。（我花を庭に見る）
S V O C

（5）S＋V＋C＋O

秦王遣趙王書。（秦王趙王に書を遣る）
S V C O

師教弟子道。（師弟子に道を教ふ）
S V C O

（6）S＋V＋C＋C

管仲仕桓公於斉。（管仲桓公に斉に仕ふ）
S C C C

我遇師於途。（我師に途に遇ふ）
S V C C

※補語が二つ重なった時は、二つを順番に読み述語に返る。

（2）置き字

置き字は訓読したときに読まない字のことで、書き下し文にするときには、その意味に対応する送り仮名を前後の文字に付けます。例文を参照ください。

①而（じ）・・・順接・逆接　「て（・して・ども）」

・学而時習之。（学びて時に之を習う）

・樹欲静而風不止。（樹静かならんと欲すれども風止まず）

②於（お）・于（う）・乎（こ）・・・場所・目的・対象・起点・比較・受身・理由　「を・に・より」

・良薬苦於口而利於病。（良薬は口に苦けれども病に利あり）

・吾十有五而志于学。（吾十五にして学に志す）

・青取之於藍　青は之（これ）を藍（あい）より取る

③矣（い）・焉（えん）・也（や）・・文末で断言・強調の意を添える

・胸中正則眸子瞭焉。（胸中正しければ則ち眸子（ぼうし）瞭（あきら）かなり）

④兮（けい）・・・詩の中で調子を整える働きをする。

・秋風起兮白雲飛。（秋風起こり、白雲飛ぶ）

而	於	乎	矣	焉
文頭	文中	文末	文末	文中・文末
①接続詞（順接）「しかシテ・しかうシテ」 ②接続詞（逆接）「しかるニ・しかレドモ」 ③代名詞「なんぢ」	①前置詞（関係・時間・場所）「おイテ・おケル」	①疑問・反語「か・や」 ②詠歎「かな・か・や」	①疑問・反語「か・や」	①疑問・反語「いづクンゾ・いづクニカ」 ②代名詞「これ・ーここ」

（3）再読文字

再読文字とは訓読するとき一つの字を二度読む字で、次の八つあります。例文から分かるように漢文固有の表現（？）となりますね。

①未（いまダ）・未だ～ず／まだ～でない

・未嘗敗北。（未（いま）だ嘗（かつ）て敗北せず。）

・未能事人。（未（いま）だ人に事（つか）ふる能（あた）はず。）

②将（まさニ）・且（まさニ）・・・まさに～とす／今にも～しようとする

・日将入。（日将（まさ）に入らんとす。）

・趙且伐燕。（趙且（まさ）に燕を伐たんとす。）

③当（まさニ～シ）・・・まさに～べし／当然～すべきだきっと～だろう

・当惜分陰。（当（まさ）に分陰を惜しむべし）

・君子当重礼儀。（君子当（まさ）に礼儀を重んずべし）

④応（まさニ～シ）・・・まさに～べし／きっと～だろう・～した方がよい

・応知故郷事。（応（まさ）に故郷のことを知るべし）

⑤宜（よろシク）・・・よろしく～べし／～するのがよい

・王宜従衆議。（王は宜（よろ）しく衆議に従うべし。）

⑥須（すべカラク）・・・すべからく～べし／ぜひ～する必要がある・～したい

・須常恩病苦時。（須（すべか）らく常に病苦の時を思うべし）

⑦猶（なホ～シ）・由（なホ～シ）・・・なほ～（の・が）ごとし／ちょうど～のようだ

・過猶不及。（過ぎたるは猶（な）ほ及ばざるがごとし）

・危由累卵。（危（あやふ）きこと由（な）ほ累卵のごとし）

⑧蓋（なんゾ～ル）・・・何ぞ～ざる（反語）／どうして～しないのか。いたらいいではないか

・子蓋学。（子蓋（しなん）ぞ学ばざる）

（4）返読文字

返読文字とは訓読するとき必ず語順を下から上へひっくり返して読む字のことです。例文を参照。

●否定・禁止の返読文字ー

①不・弗・・・ず

・歳月不待人。（歳月は人を待たず）

・舎其路而弗由。（其の路を舎てて由らず）

②非・・・あらず

・兵非君子器。（兵は君子の器に非ず）

③無・莫・勿・毋・・なし・なかれ

・今無一人還。（今一人も還るものなし）

・寧為鶏口、無為牛後（寧ろ鶏口と為るも牛後と為る無かれ）

・莫能仰視。（能く仰ぎ視るもの莫し）

・過則勿憚改。（過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ）

・毋妄言。（妄言すること毋かれ）

●使役の返読文字ー

①使・令・・・しむ

・使子路問之。（子路をして之を問はしむ）

・令子奉書於覇。（子をして書を覇に奉らしむ）

●受身の返読文字ー

①見・被・・・る・らる

・信而見疑、忠而被謗。（信にして疑はれ、忠にして謗らる）

●可能・許可の返読文字ー

①可・・・べし

・酒可飲。（酒は飲むべし）

●比喩（～のようだ）の返読文字ー

①如・若・・・ごとし

・如出一口。（一口に出づるがごとし）

・浮生若夢。（浮生は夢の若し）

●並列（～と）・選択（～より）の返読文字ー

①与・・・と　並列・従属

・・・より　選択

・有讐盾与矛者。（盾と矛とを鬻ぐ者有り）

・与生而無義不如烹（生きて義からんよりは烹らるるに如かず）

●起点を示す返読文字ー

三つ（自・従・由）しかないので覚えやすい。

①自・従・由・・・より

・有朋自遠方來。（朋あり遠方より来る）

・病従口入。（病は口より入る）

・由是先主遂詣亮。（是に由りて先主遂に亮に詣る）

●仮定逆説・確定逆説の返読文字ー

①雖・・・・いへども

・雖千万人吾往矣。（千万人と雖も吾往かん）

●その他の主な返読文字ー

沢山あるので主なものだけ。

①所以・・・原因・理由

・秦所以失天下。（秦の天下を失ひし所以）

②以

・請以剣舞。（請ふ剣を以て舞はん）

③毎・・・ごとに

・毎事問（事問ふ毎に）

④寡・・・すくなし

・則寡悔（則ち悔い寡し）

⑤教・遣・・・しむ（させる・使役）

・遣蘇武使匈奴（蘇武をして匈奴に使はせしむ）

⑥莫如・莫若・・・しくはなし（及ぶものはない）

・知臣莫如君（臣を知るは君にしくはなし）

⑦**不能**・・・**あたはず（できない）**

・不能料死（死を料るあたはず）

⑧**不如**・**不若**・・・**しかず（及ばない）**

・百聞不如一見（百聞は一見にしかず）

（５）句法（句形）

句法というのは、漢文を日本語的に読む際の構文のこと。白文を読んでいくには**（１）基本構造**を念頭において**句法のルール**を駆使しつつ読み進めていくことになります。句法は、その意味によって次の十五通りに分類できます。いずれも例文を参照して読み方に慣れていくことが早道と思います。

（Ａ）否定・禁止	**（Ｂ）疑問**	**（Ｃ）反語**
（Ｄ）詠歎	**（Ｅ）使役**	**（Ｆ）受身**
（Ｇ）仮定	**（Ｈ）限定**	**（Ｉ）比較**
（Ｊ）選択	**（Ｋ）抑揚**	**（Ｌ）累加**
（Ｍ）比況	**（Ｎ）願望**	**（Ｏ）接続**

（Ａ）否定・禁止の形

●単純な否定ー

不・弗	**ず**	**四十而不惑。**（四十にして惑わず）
未	**いまだず**	**未聞好学者也。**（未だ学を好む者を聞かざるなり）
非（匪）	**ずに非ず**	**人非木石。**（人は木石に非ず）
毋・無・莫・勿	**なし**	**己所不欲、勿施於人。**（己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ）

●二重否定ー

独特の言い回しに慣れることが肝要です。

無（莫）不ず **無（莫）非ず**	**ずざるはなし** **ずにあらざるはなし**
非（匪）不ず **非（匪）無ず**	**ずざるにあらず** **ずなきにあらず**
無（莫）Ａ不Ｂ **無（莫）Ａ無Ｂ**	**ＡとしてＢざるはなし** **ＡとしてＢなきはなし**
未嘗不ず **不必不ず** **不敢不ず**	**いまだ嘗てずんばあらず** **必ずしもずんばあらず** **敢えてずんばあらず**

・於物無不陥也。（物に於て陥ざる無きなり）

・無非教也。（教へに非ざる無きなり）

－－－－－－－－－－－－－

・非不悪寒。（寒を悪まざるに非ず）

・人非無遠慮。（人遠慮無きに非ず）

－－－－－－－－－－－－－

・無物不長。（物として長ぜざるは無し）

・無国無之。（国としてこれ無きは無し）

－－－－－－－－－－－－－

・無物不長。（物として長ぜざるは無し）

・無国無之。（国としてこれ無きは無し）

－－－－－－－－－－－－－

・未嘗不得見。（未だ嘗て見ゆることを得ず）

・弟子不必不如師。（弟子は必ずしも師に如かんずばあらず）

・不敢不告也。（敢へて告げずんばあらざるなり

●部分否定・全部否定ー

不常ず	**常にはずず**
不倶ず	**倶にはずず**
不必ず	**必ずしもずず**
不甚ず	**甚だしくはずず**
不復ず	**復たずず**

・家貧不常得油。（家貧しく常には油を得ず）
・其勢不俱生。（其の勢い俱には生きざらん）
・勇者不必有仁。（勇者は必ずしも仁有らず）
・甚不張虚勢。（甚だ虚勢を張らず）
・不復更人。（復た人を更へず）

●禁止・不可能ー

勿・無・莫・毋～	**～なかれ**	
不可～	**～べからず**	
不能～	**～あたはず**	
不得～	**～をえず**	

・過則勿憚改。（過ちて則ち改めむるに憚ること勿れ）
・一寸光陰不可軽。（一寸の光陰軽んずべからず）
・勇者不必有仁。（勇者は必ずしも仁有らず）
・朽木不可彫（朽木は彫るべからず）
・終不得帰漢（終に漢に帰ること得ず）

（B）疑問の形

●疑問詞を用いる場合ー

同じ漢字の疑問詞でもいろいろな読み方があるので注意が必要です。読み方は文脈から判断します。例文を参照ください。

何・胡・奚・曷・寧	**なんぞ～（や）**	
誰・孰	**たれか～（ぞ・や）**	
何・奚	**なにを（か）**	
孰	**いづれか**	
安・悪・寧・焉	**いづくんぞ～（や）**	
安・悪・何・焉	**いづく（にか）**	

何為・胡為	**なんすれぞ～（や）**
幾	**いく～（か・ぞ**
幾何・幾許	**いくばく（か・ぞ）**
如何・奈何	**いかん（せん）**
何如・何若	**いかん**
何以	**なにをもって**

・何前倨而後恭也。（何ぞ前には倨りて後には恭しきや）
・師奚不為政（師奚ぞ政を為さざる）
・誰加衣者。（誰か衣を加ふる者ぞ）
・弟子孰為好学。（弟子孰か学を好むと為す）
・大王来、何操。（大王来たるとき、何をか操る）
・汝与回也、孰愈。（汝と回とは、孰れか愈る）
・安与項伯有故。（安くんぞ項伯と故ある）
・今蛇安在。（今蛇安くにか在る）
・何為不去也。（何為すれぞ去らざるや）
・晴天有月来幾時。（晴天月有りてより来幾時ぞ）
・人生幾何。（人生幾何ぞ）
・如若何。（若如何せん）
・為之奈何。（之を為すこと奈何）
・点、爾何如。（点、爾は何如。点は人名）
・何以利吾国。（何を以て吾が国を利せん）

●終助詞を用いる場合ー

終助詞とは種々の語に付き、文の終わりにあってその文を完結させ、希望・禁止・詠嘆・感動・強意などの意を添える助詞のことです。

乎	邪	耶	哉	与	也	夫	歟
か・や							
子好勇乎（子勇を好む乎）	忘会稽之恥邪（会稽の恥を忘れたる邪）	君非崔護耶（君は崔護に非ず耶）	今安在哉（いま安に在り哉）	是魯孔丘与（是魯の孔丘与）	真不知馬也（真に馬を知らざる也）	吾歌、可夫（吾歌はん、可ならん夫）	聴者誰歟（聴く者誰ぞ歟）

・何愛一牛。（何ぞ一牛を愛しまんや）
・君子奚患乎無余。（君子奚ぞ余り無きを患へん）
・誰知烏之雌雄。（誰か烏の雌雄を知らんや）
・夫何憂何懼。（夫れ何をか憂へ何をか懼れん）
・孰大焉。（孰れか焉より大ならん）
・安知鴻鵠之志哉。安んぞ鴻鵠の志を知らん哉
・割鶏焉用牛刀。（鶏を割くに焉くんぞ牛刀を用ゐんや）
・悪能正之。（悪くんぞ能く之を正さん）
・烏識其時。（烏んぞ其の時を識らん）
・夫子安不学。（夫子安くにか学ばざらん）
・子焉聞之。（子焉くにか之を聞く）
・何為不去也。（何為れぞ去らざるや）
・胡為乎来哉。（胡為れぞ来る哉）
・為歓幾何。（歓を為すこと幾何ぞ）
・如何不涙垂。（如何ぞ涙垂れざらん）
・奈何無父而生乎。（奈何ぞ父無くして生まれんや）
・如若何。（若を如何せん）
・何以殺人。（何を以てか人を殺す）

●疑問の終助詞を用いる場合ー

（※例文は疑問形と重なるケースも載せています）

乎	邪	耶	哉	与	也	夫
～（ん）や						
可謂孝乎（孝と謂ふ可けん乎）	奈何憂崩墜邪（奈何ぞ崩墜を憂へんや）	問之曰、客耶（之に問ひて曰く客耶と）	何畏彼哉（何ぞ彼を畏れん哉）	是魯孔丘与（是魯の孔丘与）	也（何ぞ其れ多能なる也）	吾歌、可夫（吾歌はん、可ならん夫）

（C）反語の形

「疑問」と「反語」は見かけの上では殆ど同じですが、疑問の形をとりながら「**～だろうか。いや～でない**」と、その内容と反対のことを強調して言うのが反語です。反語形には「**ん**」や「**や**」が付くことがポイントです。

●疑問の助字を用いる場合ー

何・胡・奚・曷・寧	なんぞ～ん（や）
誰・孰	たれか～ん（や）
何・奚	なにをか～（や）
孰	いづれか～ん（や）
安・焉・悪・烏・寧	いづくんぞ～ん（や）
安・焉・悪・何	いづくにか～ん（や）
何為・胡為	なんすれぞ～ん（や）
幾何・幾許	いくばく（ぞ）
如何・奈何	いかんぞ～ん（や）
如～何	～をいかんせん
何以	なにをもつて～ん（や）

●特殊な反語の形ー

①豈～哉（乎）：あに～（ん）や

・豈遠千里哉。（豈に千里を遠しとせん哉）

②独～哉（乎）：ひとり～ん（や）

・独畏廉将軍哉。（独り廉将軍を畏れん哉）

③敢～（乎）：あへて～ん（や）

・役夫敢伸恨。（役夫敢へて恨みを伸べんや）

④敢不～（乎）：あへて～ざらん（や）

・敢不敬乎。（敢へて敬せざらん乎）

⑤何不～／盍：なんぞ～ざる

・何不秉燭遊。（何ぞ燭を秉りて遊ばざる）

・子盍為我言之。（子盍ぞ我が為に之を言はざる）

（D）詠歎の形

●文頭に感動詞を置く場合	
嗚呼・于嗟・嗟・嗟乎・噫	ああ
●文末に助字を用いる場合	
哉・矣・夫・与・乎・也・耶	かな・か・や
●疑問・反語の形を用いる場合	
何～也	なんぞ～や
豈不～哉	あに～ずや
不亦～乎	また～ずや

・嗚呼哀哉。（嗚呼哀しからず哉）

・賢哉、回也。（賢なる哉、回や）

・何楚人多也。（何ぞ楚人の多き也）

・豈不悲哉。（豈に哀しからず哉）

・不亦説乎。（亦た説ばしからず乎）

（E）使役の形

人を使って何かをさせることを使役といい、「・・・をして・・・しむ」と読みます。

●使役の助字（使・令・教・遣）を用いる場合	
使A B	AをしてBしむ
●使役を暗示する動詞がある場合	
命A B	Aに命じてBしむ
●文意から判断して使役に読む場合	
扶而去之（扶(たす)けて之を去らしむ）	

・使人知己。（人をして己を知らしむ）

・令趙王鼓瑟。（趙王をして瑟を鼓せしむ）

・我教人往呉楚。（我人をして呉楚に往かしむ）

・遣蘇武使匈奴。（蘇武をして匈奴に使ひせしむ）

・命故人書之。（故人に命じて之を書せしむ）

・召釈之参乗。(釈之を召して参乗せしむ)

（F）受身の形

●受身の助字を用いる場合	
見・被・為・所	～る・らる
●置き字（於・于・乎）を用いる場合	
B於A	AにBる・らる
●複合形の場合	
為A所B	AのBするところとなる
●受身を暗示する動詞がある場合	
封・敘・任・補	動詞に「る・らる」を送って受身に訳す
●文章から受身に読み場合	
恵王不用（恵王に用いられず）	

・是以見放。（是を以て放たれたり）
・忠而被謗。（忠にして謗らる）
・我謗於人。（我人に謗らる）
・辱於奴隷人之手。（奴隷人の手に辱めらる）
・我為人所謗。（我人の謗る所と為る）
・太公封於斉。（太公は斉に封ぜらる）

（G）仮定の形

●副詞をもちいる場合		
如・若・仮	もし～ば・とも	
苟	いやしくも～ば・とも	
縦・縦令・仮令	たとひ～とも	
●接続を表す語を用いる場合		
雖	～といへども	
則	～ればすなはち	
●否定の形を重ねる場合		
不A不B	Aずんば（ざれば）Bず	
無A不B	Aなくんば（ければ）Bず	
非A不B	Aにあらずんば（ざれば）Bず	
●文意から仮定に読む場合		
使AB	AをしてBしめば	
今～	いま～ば	
●その他の仮定の形		
微～	～なかりせば	
不者・否者	しからずんば	

・如有能信之者、（如し能く信ふる者有らば）
・学若不成死不還。（学若し成らずんば死すとも還らず）
・苟有過人必知之。（苟くも過ち有らば人必ず之を知らん）
・縦彼不言、我恥之。（縦ひ彼言わずとも、我之を恥ず）
・仮令能之、不易售。（仮令ひ之を能くするとも、售るに易からず）
・雖死不恨。（死すと雖も恨みず）
・学而不思則罔。（学びて思はざれば則ち罔し）
・人不学不知道。（人学ばざれば道を知らず）
・民無信不立。（民信無くんば立たず）
・伯夷非其君不事。（伯夷其の君に非ずんば事へず）
・使民衣食有余、（民をして衣食余らしめば、）
・今子食我、（今子我を食らはば、）
・微管仲吾其被髪左衽矣。（管仲微かりせば吾其の被髪左衽せん）
・不者、若属皆且為所虜。（不者んば、若が属皆且に虜とする所と為らん）

（H）限定の形

「～だけ（だ）」と限定することで強調を表します。

●限定の副詞を用いる場合		
唯・惟・只・但・徒・直・祇	ただ～のみ	
独	ひとり～（のみ）	
纔・僅	わづかに～（のみ）	
●限定の終尾詞を用いる場合		
耳・爾・已・而已・而已矣	～のみ	
●限定の副詞tお終尾詞を用いる場合		
直～耳	ただ～のみ	
●特殊な限定		
自非～	～にあらざるよりは	

・父母唯其疾之憂。（父母は唯だ其の疾を之れ憂ふのみ）
・今独臣有船。（今独り臣のみ船有り）
・僅以過冬。（僅かに以て冬を過ごすのみ）
・此亡秦之続耳。（此れ亡秦の続のみ）
・非死、則徒爾。（死せるに非ざれば、則ち徒りしのみ）
・求其放心而已矣。（其の放心を求むるのみ）
・直不百歩耳。（直だ百歩ならざるのみ）
・自非聖人、所難免也。（聖人に非ざる自は、免れ難き所なり。）

（I）比較の形

●置き字（於・于・乎）を用いる場合					
A～於B	AはBよりも～				
●「不如・不若」を用いる場合					
A不如B	AはBにしかず				
●「莫如」などを用いる場合					
莫如～	～にしくはなし	A莫～於B	AはBより～（なる）はなし	莫～焉	これより～（なる）はなし

・青青於藍。（青は藍より青し）
・百聞不如一見。（百聞は一見に如かず）
・知子莫如親。（子を知るは親に如くはなし）
・禍莫大於不知足。（禍いは足るを知らざるより大なるは莫し）
・乱莫大焉。（乱焉より大なるは莫し）

（J）選択の形

二つのものを比較しどちらか一方を選択する形。

●「寧・孰」を用いる場合					
寧A無B	むしろAともBすることなかれ				
孰与・孰若	いづれぞ				
●「与」と他の語の複合形の場合					
与A寧B	AよりはむしろB				
与A不如B	AよりはBにしかず				
与A孰与（若）B	AよりはBにいづれぞ				

・寧為鶏口無為牛後。（寧ろ鶏口と為るとも牛後と為るなかれ）
・孰与君少長。（君の少長に孰与れぞ）
・礼与其奢也、寧倹約。（礼は其の奢らんよりは。寧ろ倹約なれ）
・与生而無義不如烹。（生きて義無からんよりは烹らるるに如かず）
・与其有譽於前、孰若無毀於其後。（其の前に譽有らんよりは、其の後に毀り無きに孰若ぞ）

（K）抑揚の形

抑揚の形は、前半で「Aでさえ」と調子を抑え、後半で「ましてBならなおさらだ」と持ち揚げる表現です。

①AB、（而）況C乎・・・AはB（しかるを）いはんやCをや

②A且（猶）B、況C乎・・・Aすらかつ（なほ）B，いはんやCをや

③A且（猶）B、安C乎・・・Aすらかつ（なほ）B、いずくんぞCせんや

④以A且（猶）B・・・Aをもってすらかつ（なほ）Bす

⑤以A而B・・・AをもってしてしかもBす

・天子不召師、而況諸侯乎。（天子すら師を召さず、而るを況んや諸侯をや）

・死馬且買之、況生者乎。（死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや）

・臣死且不避、卮酒安足辞。（臣死すら且つ避けず、卮酒安くんぞ辞するに足らんや）

・以獣相食、且人悪之。（獣の相ひ食らふを以てら且つ人之を悪む）

・以平将軍之功、而不過国守。（平将軍の功を以てして、而も国守に過ぎず）

（L）累加の形

抑揚形の一種で、前にあげた事にさらに別のことを加えて後の文を強調する表現です。

●限定の副詞と否定詞を用いる場合		
不唯（独）A、B	**ただに（ひとり）Aのみならず、B**	
非唯（独）A、B	**ただに（ひとり）Aのみにあらず B**	
●限定の副詞と反語の形を用いる場合		
豈唯～（乎）	**あにただに～のみならん（や）**	
何独～（乎）	**なんぞひとり～のみならん（や）**	

・不唯無益、而亦害之。（唯に益無きのみならず、而も亦た之を害す）

・不独漢朝、今亦有。（独り漢朝のみならず、今も亦た有り）

・非独賢者有是心也。（独り賢者のみ是の心有るに非ざるなり）

・豈唯敝邑。（豈に唯に敝邑のみならんや）

・故郷何独在長安。（故郷何ぞ独り長安に在るのみらんや）

（M）比況の形

（まるで）「～のようだ・～と同じだ」のように比喩を表現する形です。

①如（若）～・・・（の・が）ごとし

②似～・・・ににたり

③猶（由）～・・・なほ～（の・が）ごとし

④譬如・・・たとへば（のが・）～ごとし

・於我如浮雲。（我に於て浮雲の如し）

・傍若無人。（傍に人無きが若し）

・似重有憂者。（重ねて憂ひ有る者に似たり）

・過猶不及。（過たるは猶ほ及ばざるがごとし）

・譬如為山。（譬へば山を為るがごとし）

（N）願望の形

相手への願望や自分の希望を表す表現です。

①請～・・・こふ～（ん）

②願～・・・ねがはくは～（ん）

③冀・庶・庶幾・・こひねがふ。こひねがはくは

④安得～・・・いづくんぞ～をえん

⑤欲～・・・（んと）ほつす

・請以剣舞。（請ふ剣を以て舞はん）

・願大王急渡。（願はくは大王急ぎ渡れ）

・冀復得兔。（復た兔を得んことを冀ふ）

・王、庶幾改之。（王、庶幾はくは之を改めよ）

・安得猛士兮守四方。（安くんぞ猛士もて四方を守るを得ん）

・欲厲其歯。（其の歯を厲かんと欲す）

（O）接続の形

語と語、句と句、文と文とを接続します。あとで白文を読んでいくとき、しょっちゅうお目にかかります。

則	乃	即	便	輒	載	因	然
①②すなはち ③～ればすなはち	①②③すなはち	①②すなはち ③～ればすなは	すなはち	すなはち	すなはち	よりて	①しからば・しかれば ②しかるに・しかれども
①そこで・そして ②それは・それこそ ③～すれば	①そこで・そして ②それなのに・そのくせ ③それでこそ・はじめて	①すぐに・たちどころに ②とりもなおさず・そのまま ③～すれば	すぐに・そのまま	そのたびごとに	～しながら	～によって・そこで・そのために	①そうであるならば ②そうではあるが

――――――

以上で白文を読んでいくための必要最小限の基本装備が整ったと思います。次のステップとしていよいよ白文を読んでいくことにします。もし行き詰まればそこでまた基本装備の点検をし直せばいいでしょう。ゆっくり参りましょう。。。

●参考図書

（1）柿崎広幸・松代彰「基本漢文マスター」文英堂・２０１８

（2）加藤徹「白文攻略・漢文法ひとり学び」白水社・２０１３